Osaka University Knowledge Archive

Title	古墳時代原初的官僚層形成に関するノート
Author(s)	中久保, 辰夫
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2014, 48, p. 25-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56617
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

古墳時代原初的官僚層形成に関するノート

中久保　辰 夫

キーワード：原初的官僚層／古墳時代／陪冢／初期群集墳／渡来人

1. 本論の視座

日本古代国家論において、官僚制と公民制を基本とする律令国家の成立を重視する考え方は根強い。日本古代の官僚制とその前史についてもこれまで文献史学によって人制、部民制、国造制、ミヤケ制といった重厚な議論が蓄積されてきたが、いつ、どういった契機をもって進行したのかといった点については、厳密な史料批判を経て論証できる手がかりは限られている。

たほう、飛躍的に増加した資料と着実な研究を蓄えた考古学は、古代国家形成論においてその存在感を増してきた（近藤 1983、田中 1991、都出 1991・1996、福永 2005、菱田 2007）。古墳の築造が墳形と規模によって秩序づけられた前方後円墳体制と呼ぶべきものであることを論じ、古墳時代社会を初期国家段階と位置づけた都出比呂志の研究はその代表的な議論である。ただし、古墳時代では熊本県江田船山古墳出土銀象嵌銘大刀、埼玉県埼玉稲荷山古墳出土鉄剣銘文などを含めても、具体的な統治組織や官僚層の実態をしめす考古資料はごく限られており、さらに王宮等の実態が不鮮明であるといった弱点も有している。

しかしその一方で古墳および古墳群の分析をもとに原初的な官僚にかんする試論は蓄積されてきた。その代表的な資料として、大型前方後円墳の周囲に配置された小規模な古墳である陪冢、5 世紀代に築造された小規模墳が群

在する古墳群があげられる。ただし、これらの古墳の調査分析はそれぞれに重要な示唆を含みながらも、個別の事例研究により評価がなされてきたために、全体的な位置付けが必ずしもなされていない。

本稿では、これまで原初的官僚にかかわるとされてきた考古資料について再吟味し、その出現と展開過程を把握し、日本古代の官僚層形成に関する新しい視角を模索してみたい。なお、本論では考古資料の時期比定について古墳編年および土器資料を重視するが、その実年代観については最近の古墳研究の成果を参照した（福永2005、鈴木2014a・b）。

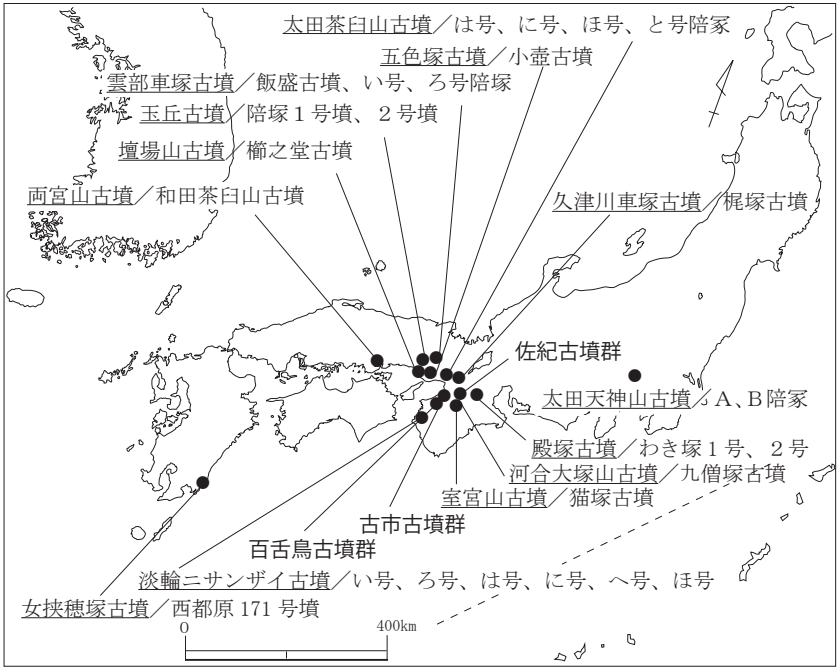
2. 陪冢の被葬者論と原初的官僚

（1）陪冢論の現在

陪冢とは、大型前方後円墳の周囲に配置された小規模な古墳を指し、現在93基が確認されている（山田1997、藤田2006・2011）。陪冢、陪塚、従属墳などと表記・呼称されるが、本稿では周知の遺跡名や他の研究者の用法を尊重する場合以外は、陪冢と呼ぶことにしたい。

陪冢は近畿地域を中心とし、突出した規模を有する前方後円墳および大型古墳群にのみ認められた、きわめて限定的な存在であったことが指摘できうる（図1）。そして、そのほとんどが古墳時代中期に築造された点にも留意が必要である（藤田2006）。現況で最も古く位置づけられる可能性がある陪冢は、佐紀古墳群中の佐紀石塚山古墳のい号陪冢、ろ号陪冢（西）、ろ号陪冢（東）である。また古市古墳群の津堂城山古墳には周濠内に島状遺構が認められるが、陪冢は存在しない。

より確実な陪冢の成立は、古市古墳群・仲津山古墳の高塚山および鍋塚古墳、上石津ミサンザイ古墳の寺山南山古墳にみることができる。このうち、堺市西区上野芝に所在し、上石津ミサンザイ古墳の後円部外堤北東側に築造された寺山南山古墳は、最近の調査によって外濠に接するか、濠を共有し、1辺約28mを測る方墳である事が判明している（十河ほか2012）。その時期



山田 1997、藤田 2006・2011 を参照して作成

＜古市古墳群＞
仲津山古墳／高塚山、鍋塚　墓山古墳／向墓山、浄元寺山、野中、西墓山
誉田御廟山古墳／誉田丸山、東山、アリ山、栗塚、東馬塚
市野山古墳／唐櫃山、長持山、宮の南塚、御曹司塚、赤子塚、衣縫塚、小具足塚
岡ミサンザイ古墳／鉢塚、落塚　白髪山古墳／小白髪山
＜百舌鳥古墳群＞
石津上ミサンザイ古墳／七観、七観音、寺山南山、狐塚
大仙陵古墳／丸保山、収塚、竜佐山、孫太夫山、新知見の古墳、菰山、塚廻、
　大安寺山、茶山、樋の谷、源右衛門山、鏡塚、狐山、銅亀山、夕雲１丁南
いたすけ古墳／善右ェ門山、吾呂茂山塚　百舌鳥御廟山古墳／カトンボ山、万代山
田出井山古墳／鈴山、天王　土師ニサンザイ古墳／聖塚、聖の塚、経塚
＜佐紀古墳群＞
佐紀石塚山古墳／い号、ろ号（西）、ろ号（東）陪冢
コナベ古墳／大和 21、17、18、26、20、16、23、22、24、25 号陪冢
ウワナベ古墳／大和３、５、６号　ヒシアゲ古墳／ろ号、は号、に号、ほ号陪冢

図1　陪冢を有する古墳（群）

は、円筒埴輪が埴輪検討会編年Ⅲ期2段階新相（埴輪検討会2003）、墳丘から出土した須恵器がTG232期（4世紀末～5世紀初頭）とすることができる。ただし当該期の陪冢はその築造数において少なく、増加をみるのはTK73期、すなわち5世紀前葉を中心とする時期である。その後、5世紀中葉から後半にかけて陪冢の築造が盛行するが、陪冢の終焉に関しては古市古墳群・白髪山古墳の小白髪山古墳（6世紀初頭～前葉；MT15期～TK10期）であり、墳長46mの前方後円墳となる。ただし、後期に位置付けられる陪冢は、小白髪山古墳に限定されてしまい、基本的には古墳時代中期に収まる事例がほとんどである。

陪冢と被葬者論　大型前方後円墳を主墳として大王や豪族に見立て、その周囲の小規模古墳を随伴する従者に重ねて陪冢と捉える考え方は、古墳研究の早い段階から定説化していた。しかし、その歴史的意義を深めたのは、戦後、西川宏の研究によるところが大きい（西川1961）。西川は、まず陪塚を一つの大形古墳に対して、①規模・施設・副葬品等が量的あるいは質的に劣り（従属性）、②同時代の築造に係わり（同時代性）、③ある程度計画的に配置したとみられる（計画性）という三条件を有する古墳を陪冢として再定義した。そして、陪塚は首長が専制君主に転化していく過程に出現し、大規模な政治機構のなかで実務処理を担った原初的官僚層に対応すると論じた。

西川の議論は、その後に近藤義郎、田中琢、藤田和尊に引き継がれ、陪冢論の1つの流れとなる（近藤1983、田中1991、藤田2006・2011）。西川説を批判的に吟味した藤田和尊は、陪冢認定条件に「主墳の濠の周堤の上に築造されるか、またはほぼ接する位置にある」という条件を加え、大阪府野中古墳を主な論拠として、職業的な専門の分化は欠けているものの、文官と武官の両側面を兼ね備えた原初的官僚の姿を推測する。

一方で発掘調査の進展によって陪冢の被葬者論は、その根底を揺るがす見解が提示されている（森・宮川1953、石部1958）。森浩一と宮川徙は堺市カトンボ山古墳の調査において埋葬が不可能なほど鉄製品が大量に埋納されていることに注意を傾け、被葬者不在と結論づけた（森・宮川1953）。大阪

府墓山古墳の陪冢である西墓山古墳の調査を担当した山田幸宏は陪冢における人体埋葬について理解を示しつつも、結論的には西墓山古墳を「副葬用陪塚」であると説く（山田1997）。

このように陪冢は、その評価によっておおむね5世紀代の政治社会を大きく左右する古墳といえるのである。

（2）野中古墳と七観古墳

以上の通り、被葬者の有無を巡って陪冢の評価は大きく2分されているが、最近、大阪府藤井寺野中古墳（高橋・中久保編2014）と堺市七観古墳（阪口編2014）の出土遺物が再検討され、陪冢論は一歩前進しつつある。

野中古墳　野中古墳は古市古墳群中に所在し、墳長225mを測る大型前方

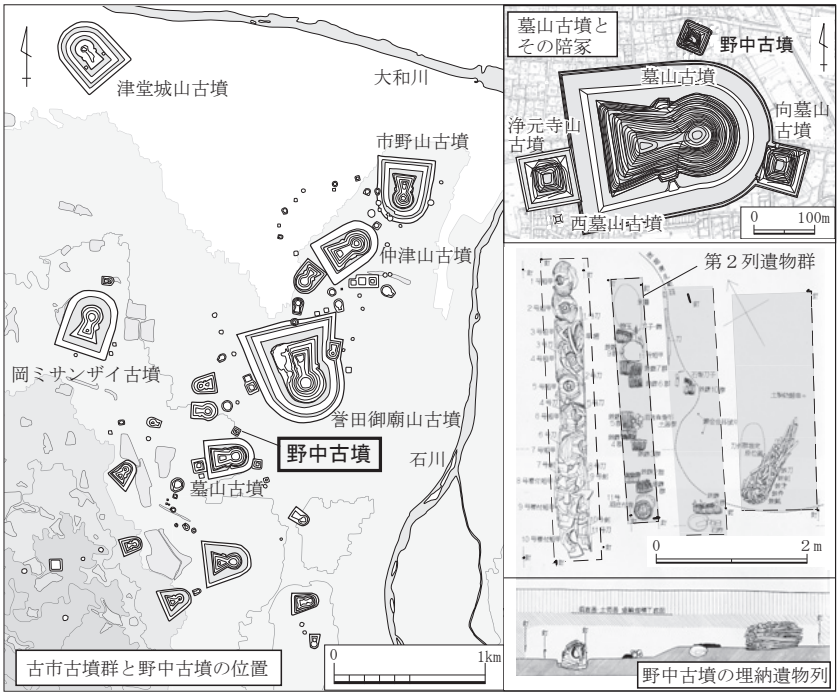


図2　古市古墳群と野中古墳

後円墳である墓山古墳の陪冢である（図 2）。主体部より 5 列の埋納遺物群が検出され、第 1 列遺物群、第 2 列遺物群と順に呼び分けられている（北野 1976）。

第 2 列遺物群には南より眉庇付甲、鉄鏃、陶質土器、横矧板鋲留短甲、刀子、管玉、鉇が検出された。発掘調査を担当した北野耕平は、朱の散布に注意を傾け、ここに被葬者の存在を推定し、軍事組織を束ね、甲冑を配布した人物を考える（北野 1976）。ただし、第 2 列遺物群には 594 本の鉄鏃が埋納されており、その矢柄とともに木櫃におさめられていたのだと想定すると、被葬者を埋葬する空間はない。[1] そのため、被葬者の存在を疑問視する見解もある。

しかし、副葬品の編年研究が進展したことと出土遺物の再検討により、新たな事実も判明した。第 2 列遺物群の横矧板鋲留短甲は、野中古墳に埋納された 11 領の甲冑群のうち、最新式に位置付けられ、出土品の型式学的検討によって野中古墳は中期中葉（5 世紀中葉）と位置づけることが明確となった（鈴木 2014a、橋本 2014、中久保 2014）。その結果、主墳である墓山古墳（5 世紀前葉）とは須恵器 1 型式ほどの時期差が認められ、第 2 列の横矧板鋲留短甲は、墓山古墳被葬者の生存中に拝領されたものではなく、その死後に入手されたものである蓋然性が高くなった（鈴木 2014a）。したがって野中古墳を「副葬用陪塚」とみることは難しく、造営主体の存在が浮かび挙がってきたのである。

それでは野中古墳の造営主体には、どういった像が描けるだろうか。鈴木一有は墓山古墳の被葬者との密接な関係がある出自をもち、倭王権における地位のもと、軍事・外交の任務を遂行したと評価し（鈴木 2014a）、筆者も軍事に加え、対外交渉、産業殖産に力を注ぐ中央政権を支えた人物像がふさわしいと考えた（中久保 2014）。さらに、高橋照彦は大型前方後円墳には大王およびその親族が埋葬された蓋然性が高いと推測した上で、陪冢の被葬者像に大王の親族を含まれる可能性を考慮しつつも、重臣・陪臣であったと考える（高橋 2014）。

七観古墳　最近、百舌鳥古墳群に所在する上石津ミサンザイ古墳（4 世紀末～ 5 世紀初頭）の陪冢である堺市七観古墳の出土遺物が再検討され、詳細かつ良質な報告がなされている（阪口編 2014）。直径約 50m、高さ約 8m を測る 2 段築成の七観古墳（5 世紀前葉）においても 3 基の内部施設が確認されているが、明確な人体埋葬の痕跡は確認されていない。ただし、第 1 槨は埋葬施設である可能性が十分にあることが指摘されている。

鈴木一有は最新の副葬品編年研究をふまえたうえで、主墳である上石津ミサンザイ古墳被葬者の死後に、七観古墳の副葬品が入手されたと論じた（鈴木 2014b）。阪口英毅は七観古墳を従属性、同時代性、計画性、近接性の観点から吟味し、陪冢の要件を満たしていることを認め、「強大な権力を行使した上石津ミサンザイ古墳被葬者の膝下にあって、その政権運営を支え、何らかの職掌を果たした個人あるいは組織の存在を反映している」と考える（阪口編 2014）。

（3）小結　陪冢被葬者の存在と性格

以上、陪冢にかんする研究史をたどり、出土品の再検討に基づく最近の議論について論述してきた。多くの陪冢の被葬者については依然としてその有無を含めて実態不鮮明な部分も少なくないが、野中古墳や七観古墳など古市・百舌鳥古墳群の内実を示す良質な資料に造営主体の存在が浮かびあがってきた成果は大きい。そして、古市・百舌鳥古墳群に最も鮮明に陪冢の築造が認められ（藤田 2006）、その盛衰も連関する点をふまえると、古市・百舌鳥古墳群が築造された時期にきわめて限定的にあらわれた古墳であると改めて認識することができる。

陪冢に被葬者が存在したとすれば、中央政権を支えた役割を想定する見解は各論者ともおおむね一致している。ただし、陪冢の存在は古墳の総数からみればごくわずかであり、高橋照彦が指摘するように多くの官僚層を示すものであるとは言い難い。むしろ、大王を補佐するごく少数の近臣、陪臣の存在を想定することが現実に即しており、次なる疑問としてそれに連なる大多

数の官僚層がどのように組織されたのか、そもそも存在したのかどうかといった点を追求する必要がある。次にこの点を深く掘り下げて考察してみよう。

3. 初期群集墳と新興集落の展開

(1) 5世紀における“群集墳”の再検討

古墳の存在形態には1基単独で立地する単独墳、大小含む古墳が群をなす古墳群、小規模墳が数十基～数百基群在する群集墳等がある。このうち群集墳については、6世紀以降に爆発的な増加をみることが通説であり、この現象を古い共同体の分解とともに出現した家父長的首長層の墳墓とみる近藤義郎の議論（近藤 1952）と、古墳を身分表示として理解し、家父長的家族層に至るまで身分秩序に組み込まれたと考える西嶋定生説（西嶋 1961）を代表として研究が蓄積されてきた。その詳細に関してはすでに多くの学史整理がなされている（瀬川 2001、一瀬 2012 など）。

しかし、古墳編年研究の精緻化と資料数増加に伴い、群集墳は6世紀をさかのぼる事例が鮮明となる。奈良県石光山古墳群を主対象として初期群集墳に着目した白石太一郎は、その出現契機を在地の首長の有する共同体を解体することなく、五世紀後半から六世紀にかけて生産力の著しい発展を基礎として新しく台頭してきた中小共同体の首長層や有力成員層を、ヤマト政権が直接その支配秩序に組み込もうとしたものであると考えた（白石 1976）。一方、和田晴吾は古墳時代小型墳墓を5類に分類し、c類（木棺直葬のほかに多様な埋葬施設をもつ円墳。小型低方墳の円墳化したもの）からなる古式群集墳の出現を須恵器型式でいう TK23・47 型式期に求め、この時期を古墳時代後期の開始期としてヤマト政権による有力家長層の直接的な掌握を読み取ろうとする（和田 1992・2003）。

この議論のなかで、4世紀後半以降に築造された大阪府長原古墳群は、初期群集墳の築造時期をさらにさかのぼらせる存在として注目を集めてきた。和田晴吾は長原古墳群などを群集墳的であっても、墳形に変化を及ぼすよう

な制度的変化を伴ったものと同一視できないとして、あくまでも例外的な存在として評価した（和田 2003）。しかし近年、小規模な古墳が群在する事例が近畿地域では目立つ存在になり、ただちに例外とみなすことは困難となっている。また、奈良県後出古墳群など、中央政権による軍事的な編成にともなって出現した古墳群も指摘されるようになり、改めて検討する必要が生じている。そこで初期群集墳という用語を用いて、良好ないくつかの類例を検討し、その実像に迫ることとしよう。

（2）河内湖南岸地域と長原古墳群

大阪府大阪市平野区から八尾市にかけて展開する長原古墳群を構成する古墳は現在 219 基が確認されている。長原遺跡、瓜破遺跡、木の本遺跡、八尾南遺跡から成る集落域は、5 世紀前後以降、豊富な陶質土器、初期須恵器、韓式系軟質土器とともに鍛冶、漆工芸、玉作、馬匹生産、紡織に関連する遺物が出土しており、河内湖近辺の灌漑、治水事業などの土木工事拠点の 1 つとしても主体的な役割を果たしたと考えられている（田中 2005）。渡来系集団を積極的に受け入れ、河内湖南岸に配置された複合工房群を擁する新興集落として評価することができる（中久保2013）。

長原古墳群をめぐっては、原初的な「官僚」として評価し、中央政権の掌握を推定する論説（広瀬 1984、岸本 1989 など）、指揮官クラスを含む軍事組織化の拡充を示す資料として捉える意見（豊島 2010）、中央政権による渡来系集団の直接的掌握と考える見解（寺沢 1985）、弥生時代以来の連続性を主張する議論（石部 1980）、居住集団の自立的な造墓活動とみる考え（京嶋 1997）など、様々な評価が下されてきた。近年、発掘調査の進展や再整理（櫻井 2001、寺井 2006）、支群と集落の様相を検討した大庭重信の分析（大庭 2006）によって、その造営主体を考える上での重要な事実が明らかとなっている。その成果に導かれつつ、まず長原古墳群の変遷をまとめることとしよう。

長原古墳群の変遷　長原遺跡では弥生時代以降方形周溝墓が築造されてい

るが、4 世紀前葉～中葉には造墓活動は停止しているため、長原古墳群の展開は 4 世紀後葉（布留 3 式期）に築かれた長原 1 号墳（塚ノ本古墳）、85 号墳（一ヶ塚古墳）を嚆矢として理解出来る。続く TG232 期（4 世紀末～ 5 世紀初頭）に長原 170 号墳（高廻り 2 号墳）などが築造されるが、5 世紀前葉（TK73 期）以降に質的な変化があり、墳長一辺 15m 以下の方墳数が増大し、TK23・47 期にいたるまで現在判明しているだけで 200 基以上が築造された（図 3）。これらの方墳群には規格的な小形円筒埴輪や形象埴輪の樹立がみられ、須恵器の豊富な供献が認められる。その終焉時期は、横穴式石室を導入した南口古墳（6 世紀初頭；MT15 期）築造以降であり、この時期を最後に

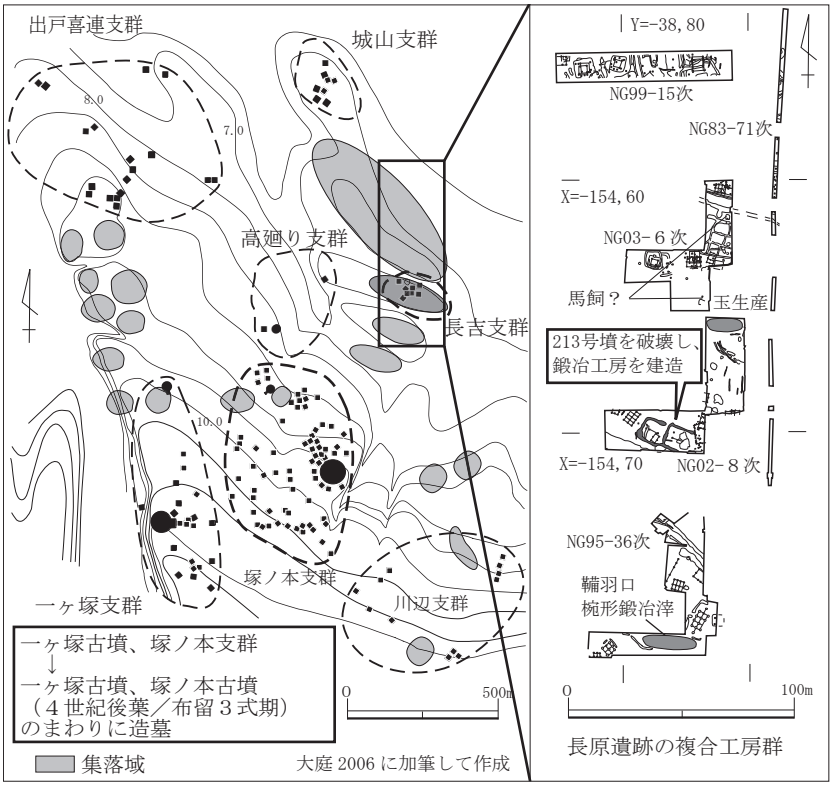


図3　長原古墳群と複合工房群

築造が止む。こうした変遷過程より、長原古墳群を弥生時代以来の連続性で理解することは困難であり、むしろ同じ盛衰をたどる古市古墳群、とりわけ小規模墳増加が陪冢と時期的に重なる点を指摘したい。

長原古墳群の被葬者像　以上の変遷をたどる長原古墳群には、2つの興味深い現象がみられる。1つは、4世紀後葉に位置付けられる塚ノ本古墳（長原1号墳）、一ヶ塚古墳（85号墳）の周囲に小方墳が築造され、塚ノ本支群、一ヶ塚支群を形成する点である。支群中には、塚ノ本古墳から約12m離れた位置にあり、韓式系軟質土器の鍋を供献する長原14号墳、一ヶ塚古墳支群に含まれ、須恵器大甕を土器棺として用いている長原87、180号墳が存在する。これらの古墳は明らかに在来の葬送儀礼や埋葬方法とは異質な特殊例であり、渡来系集団との関わりを推察できるものである。新たに築造される方墳群の被葬者が渡来系集団であっても、古墳群形成の契機となった古墳被葬者とのつながりを意識していることがうかがえる。

古墳被葬者を考える上で、集落域の土器様相からみえる集団関係の復元は示唆に富む。長原遺跡群の煮炊器様相は、渡来系集団の移住・定着に加えて、積極的に新来の調理を取捨選択しながら受容する在来集団の姿をあらわすものであり、想像を逞しくするならば、渡来系集団と在来集団との間に婚姻や世代交代なども考えることができる（田中2005，中久保2013）。定着した渡来系集団、それが在来の集団と融合することによって出現した新集団の墓域と長原古墳群は理解することができるだろう。

一方で、前代からの系譜を否定する現象も認められる。長原遺跡02－8次調査では4世紀後葉に築造された長原213号墳を破壊し、5世紀初頭から前葉に時期比定できる鍛冶工房が操業していることが明らかとなった。こうした現象は長原遺跡に居住した集団の自発的な行為とみることは難しく、地域社会の事情を超えた要請によって前代の古墳を破壊してまでも新技術の導入を優先した意図が感じられる。

河内湖湾岸地域の開発と古墳群　以上の点から筆者は、長原古墳群を中央政権の対外交流戦略にそって渡来系集団の定着・融合、新技術導入による開発

がなされた結果、新しく台頭してきた渡来系集団を含む有力成員層の墳墓として築造されるに至ったと捉えたい。

今の議論にとって、河内湖周辺における小規模古墳群の築造動態や埴輪のあり方を中央政権による直接支配と結びつけて検討した関真一や西本和哉の研究は、参考になるところが多い。関は生駒山西麓では大規模前方後円墳の築造が止む5世紀中葉に群集墳築造が増加すると指摘し（関2007）、西本は小規模墳樹立埴輪が古市古墳群より派遣された埴輪工人によるものと考え、規格的な埴輪を政治的関係のなかで理解した（西本2009）。

興味深い点は、5世紀代には河内湖沿岸地域において新興集落の展開とともに長原古墳群を初めとする小規模古墳群の造営がみられる点である。韓半島から渡来した技術者集団を積極的に登用した産業殖産は、河内台地北縁の長原遺跡群を代表として5世紀を前後する時期にはじまり、5世紀中葉に生駒西麓（西ノ辻遺跡、神並遺跡、鬼虎川遺跡）および上町台地（難波宮下層遺跡）へ、5世紀後葉以降、北河内（蔀屋北・讃良郡条里遺跡、高宮遺跡、森遺跡）へと、ちょうど河内湖をめぐるように南から北へ展開する（中久保2013）。そして、集落の展開は隣接する長原古墳群（河内台地北縁）、植附古墳群（生駒西麓）、太秦古墳群（北河内）の築造時期と符合する。こうした現象は、長原古墳群と同様に理解することが出来よう。[2)]

（3）近畿各地の初期群集墳と集落遺跡

新沢千塚古墳群と橿原市域の遺跡　約1.5㎞四方に広がる範囲に約600基もの古墳が築造された奈良県橿原市新沢千塚古墳群は、初期群集墳をめぐる研究史の中で常に注目を集めてきた。新沢古墳群の出現は4世紀中葉に比定できる新沢500号墳を嚆矢とするものの、木棺直葬を埋葬施設とする方墳および円墳群の築造は5世紀中葉以降である。付近には5世紀前半の1辺98mを誇る方墳の朴山古墳、6世紀前半の鳥屋ミサンザイ古墳（前方後円／138m）が築造されているが、古墳数が増加する5世紀後半代には付近に大型前方後円墳が存在しない点には注意する必要があるだろう。豊島直博は新沢千塚古

墳群から出土した武器・武具組成を吟味し、軍事組織の復元を試みている（豊島2010）。

新沢古墳群の存在に加え、橿原市域における集落遺跡の調査も進んできたことから、軍事的な側面以外から理解することも可能となってきた。橿原市域では、玉製品の生産拠点となった曽我遺跡をはじめとして、小型把手付台付鉢や小型器台などの初期須恵器が出土した四条大田中遺跡、稀少な阿羅加耶系陶質土器が出土し、多量の製塩土器に加えて木器、鋳造鉄斧、織機具部材、フイゴ羽口、鉄滓等の手工業生産関連遺物を豊富に出土した新堂（西新堂遺跡）・東坊城遺跡、鍛冶関連遺物を出土した内膳・北八木遺跡が調査されている。実態については不明な点も少なくないが、一定量の韓半島系土器の存在から渡来系集団の存在をうかがい知ることができ、またその役割は新技術の導入であったと考えられる。

こうした5世紀以降に展開する集落遺跡の近隣には、小規模な古墳群が築造されている。四条遺跡と四条古墳群、内膳・北八木遺跡と内膳古墳群、東坊城遺跡、新堂（西新堂遺跡）と曲川古墳群がその例であり、その出現時期はおおむね5世紀中葉とすることができる。先にみた河内湖周辺における様相と類似しており、軍事組織の拡充のみならず手工業生産や地域開発といった実務を担った集団の墓域としても小古墳群は捉えられる可能性がでてきたのである。

伏尾古墳群と陶邑の集落展開　伏尾遺跡は大阪府堺市伏尾・小代・平井付近一帯に位置する（図4）。付近には小阪遺跡、太平寺遺跡、大庭寺遺跡が所在し、背後には高蔵地区の須恵器窯が展開する。伏尾遺跡は開析谷をはさみ、北側には竪穴住居3棟、掘立柱建物31棟等が検出され、南側は方墳5基と墳形不明の小規模墳1基が確認され、その時期はTK216～208期に収まる。形象埴輪に加え、2条3段ないし3条4段の規格的な小形円筒埴輪が供給されている。また、1号墳（16m／方）には筒形器台、3号墳（14m／方）には大型把手付台付鉢、5号墳（10m／方）には有蓋大型鉢と、集落域に供給されない器種が出土した。

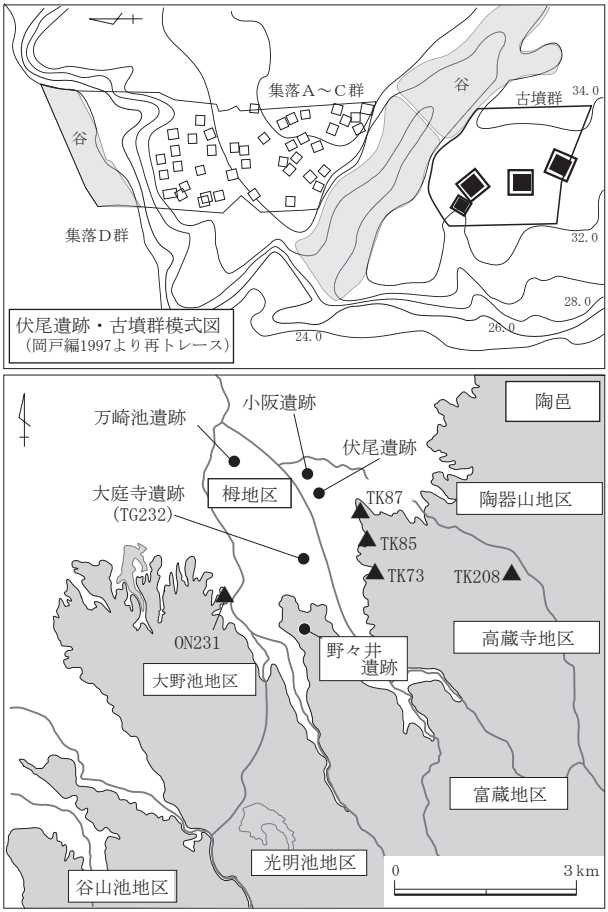


図4　伏尾遺跡・古墳群と陶邑

調査担当者の岡戸は、陶邑における集落展開を3段階に分けて捉え、渡来系工人を主体とする大庭寺遺跡の出現段階（TG232期）、小阪遺跡の出現にみえる倭系工人の須恵器生産への参画（TK73期）を経た第三段階（TK216期からTK208期）にあたる伏尾遺跡の出現に居住・生産・流通を包括した計画的な集落形成を読み解く（岡戸1997）。そして、岡戸の集落研究を須恵器生産と絡めて論じた植野浩三は、須恵器生産体制の整備と組織化、ヤマト政権の政策的背景をもとに、TK216期からTK208期に集落変化があると推定した（植野2005）。こうした先行研究は、5世紀を前後とする時期にはじまる大規模須恵器生産において、5世紀中葉から後葉にかけて質的な変化があったことを示すものである。そして、小規模方墳群の築造は組織化と関連づけて理解されている点をおさえておきたい。すなわち、軍事組織のみならず、窯業という

手工業生産の組織化も同時期に進展していると理解できるのである。

総持寺古墳群　大阪府茨木市に所在し、淀川の北岸、北摂山地から派生する舌状台地に展開する古墳群である。1km 離れた地点に墳長 226m を測る太田茶臼山古墳が築造され、その周囲には陪冢がめぐる。総持寺古墳群では 1 辺 15m を前後する小規模方墳が 43 基、円墳が 1 基検出されており、規格的な円筒埴輪とともに TK73 期以降の須恵器が豊富に出土した（小浜ほか 2005）。埴輪は高槻市新池埴輪窯で製作されたことが判明しており、太田茶臼山古墳の埴輪と共通する。一方で須恵器は陶邑産の製品も認められるが、体部に波状文を施した杯身など北河内の地方窯の製品も含まれている。

この総持寺古墳群の造営主体は、調査担当者の小浜成が指摘するように太田茶臼山古墳を盟主とする在地の集団を想定することが適切であろう。ただし、太田茶臼山古墳以後においても総持寺古墳群が築造されている点には留意が必要である。築造契機には首長墳を介した古市古墳群造営勢力の間接的関与がみられるが、継続的な築造にはより直接的な関与を想定することが可能だろう。

猪名川流域における小古墳の築造　兵庫県南東部から大阪府北西部を南流する猪名川流域は、前方後円墳および大型円墳を対象とした首長系譜分析が着実になされ（福永編 2010 など）、それに加えて小古墳の築造背景も論究されてきた（図 5）。寺前直人は小古墳を墳丘長 20m 以下と定義した上で、待兼山古墳群、桜塚 38 号墳、小塚など、TK216 期～ TK208 期以降にこれら小古墳の築造が増加することを指摘する。その上で、桜塚古墳群にみられる古墳の規模縮小と待兼山古墳群を代表とする小古墳の築造に、倭王権の新たな「支配」方式を読み説こうとした（寺前 2003）。また、清家章は小形円筒埴輪の分析をもとに長原古墳群との類似性を指摘し、埴輪祭祀の受容に大王権力の技術供与および製品供給を直接受けたと考える（清家 2003）。近年では塚口城跡第 94 次調査など、猪名野地域においても小古墳が発見されつつあり（岡田・山下編 2008）、表六甲地域の神戸市住吉宮町古墳群と同様、5 世紀代の小規模古墳群はさらに増加すると見込まれる。

時期	長尾山丘陵	池田	待兼山丘陵	千里川以南～豊中台地		猪名野	
1							
2	長尾山 ●42 万籟山	池田 茶臼山 ●62	待兼山 ○？	大石塚			
3	●54	娯三堂 円27	御神山 ○？	●76＋ 小石塚 ●49			水堂 ●60
4				嫁廻塚 円30		上臈塚 ● 70 池田山 ○？71	
5				豊中 大塚 円56			
6				御獅子 塚●55			
7			待兼山古墳群 螢池北 17 次 ■	狐塚○？ 北天平塚○？	桜塚 38 号 小塚 桜塚 1 次	御園●60	塚口城跡 94 次
8				南天平塚 ●？		御願塚●52 南清水●46	
9	勝福寺 ●40	二子塚 ●45		新免 2 号 ●23	桜塚 6 次	園田大塚山 ●44	

古墳編年の枠組みに関しては、前方後円墳集成編年および近年の研究を参照（広瀬 1992、福永編 2011）

図5　猪名川流域における首長系譜

2005年の調査において、待兼山5号墳より韓式系軟質土器の破片が出土したことは、小古墳築造の背景を探る上で興味深い。摂津地域においては豊中市上津島遺跡、利倉西遺跡、川西市栄根遺跡などTK216期～208期にかけて韓半島系土器を出土し、手工業生産関連遺物を有する集落が展開する。猪名川流域においても新興集落の出現とともに台頭しつつあった有力者層と中央政権との関わりを推察することができよう。

兵庫県たつの市黍田古墳群　5世紀代の小規模古墳群と新興集落は、その出現時期や位置関係において関連する可能性が高いが、一方で同時期でありながらも集落域が視認できないような立地にある古墳も存在する。

兵庫県たつの市に所在する黍田古墳群は、5世紀中葉以降、7世紀に至るまで丘陵斜面に築造された古墳群であり、5世紀代に比定できる一辺10m前後の方墳は少なくとも14基が発見されている（図6）。播磨地域で生産された可能性が高い地方窯の製品を含む初期須恵器に加え、E号墳よりU字形刃

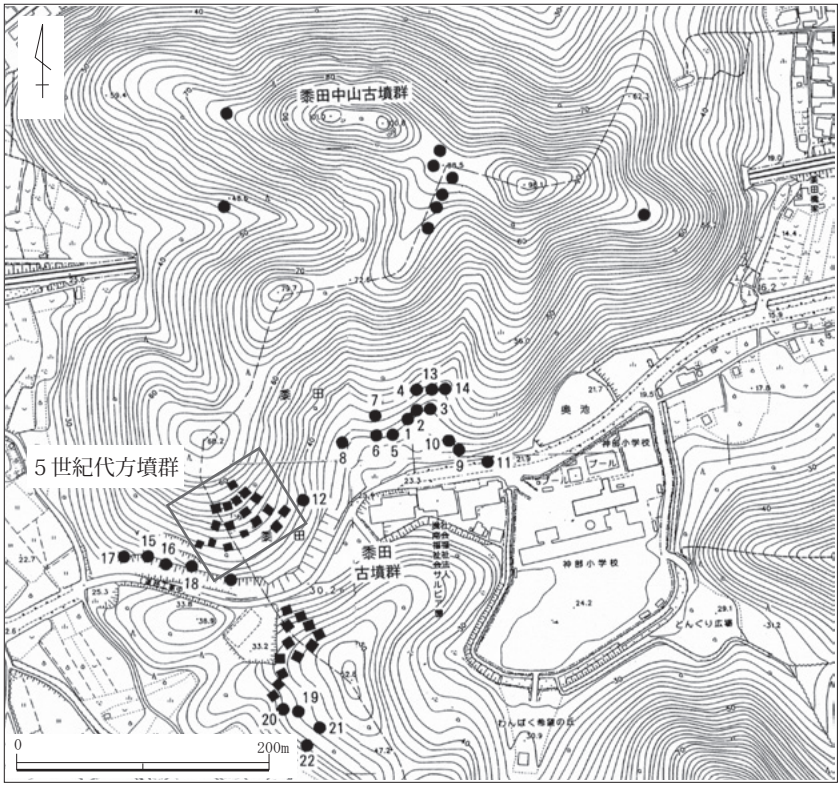


図６　兵庫県黍田古墳群

先、曲刃鎌といった新式農具と有肩鉄斧、直刀、Ｆ号墳より短剣、直刀、サルポ、有肩鉄斧、Ｕ字形刃先、長頸鏃、耳環、刀子、多量の玉類など、墳丘規模と似つかわしくない最新の武器および農具、須恵器が出土した。その造営主体は豊富な韓半島系土器が出土したたつの市竹万遺跡が候補となるが、目視できる関係にはない。同じような立地環境にある古墳群は奈良県橿原市南山古墳群などが該当する。黍田古墳群のような古墳群は例外的であり、地域のエリート層ではなく、中央政権との関係によって出現したものと想定しているが、その評価については検証が必要である。

（4）小結　初期群集墳の出現時期と性格

いくつかの類例を挙げつつ、小規模な古墳群の検討を加えてきたが、共通項に注目すると、①築造時期は5世紀前葉（TK73期）に遡り、5世紀中葉から後葉にかけて畿内各地に展開する点、②首長系譜空白期における造墓、③新興集落との連動、④規格的な埴輪樹立あるいは地方窯製品を含む須恵器供献が認められる点を指摘することができる。[3)]

以上4点のうち、初期群集墳の築造時期を5世紀前半にさかのぼらせて理解したところには批判もあるだろう。しかし、長原古墳群や総持寺古墳群等、造墓の契機に大型古墳が築造される例があるものの、その築造後も継続的に等質的な古墳が首長系譜の空白期に築造される点、規格的な円筒埴輪より復元できる中央の大規模古墳群との関わりから、この現象を地域における内在的な変化や伝統的墓制とみることは難しく、中央政権との関係性と捉えた方が理解しやすい。[4)] 今の議論のなかで、当時の共同体秩序からはみだした渡来人の掌握が群集墳形成の1つの契機となったと推測する和田晴吾の議論は示唆に富む（和田 1992）。ただし本稿では、和田が例外的とした長原古墳群等を積極的に評価したい。また、中央政権の把握は一面的には「支配」の貫徹にみえるが、新しく台頭してきた中小首長や有力成員層にとっては、伝統的な地域首長層を介することなく、自らの権益を保証されるというメリットも有していたとみることもできる。同様の視座は大型方墳の分析を手がかりに、中央政権と直属的関係を結んだ地方新興勢力の台頭とも響き合うところがある（仁木 2014）。そして、伝統的な共同体の内的な変質というよりも、むしろ渡来系集団受容といった外的刺激を受けた新しいかたちの共同体を基礎としている点で、新たな理論的展望がひらけてくる。

こうした近畿地域における初期群集墳の築造契機には、対南朝交渉の開始、韓半島情勢の変化、軍事組織化の拡充等、複雑かつ多面的な政治・社会変化が背後にあると考えられるが、ここでは長原古墳群に顕著に認められるように陪冢の築造動向と密に連関している点に注目したい。統治機構の複雑

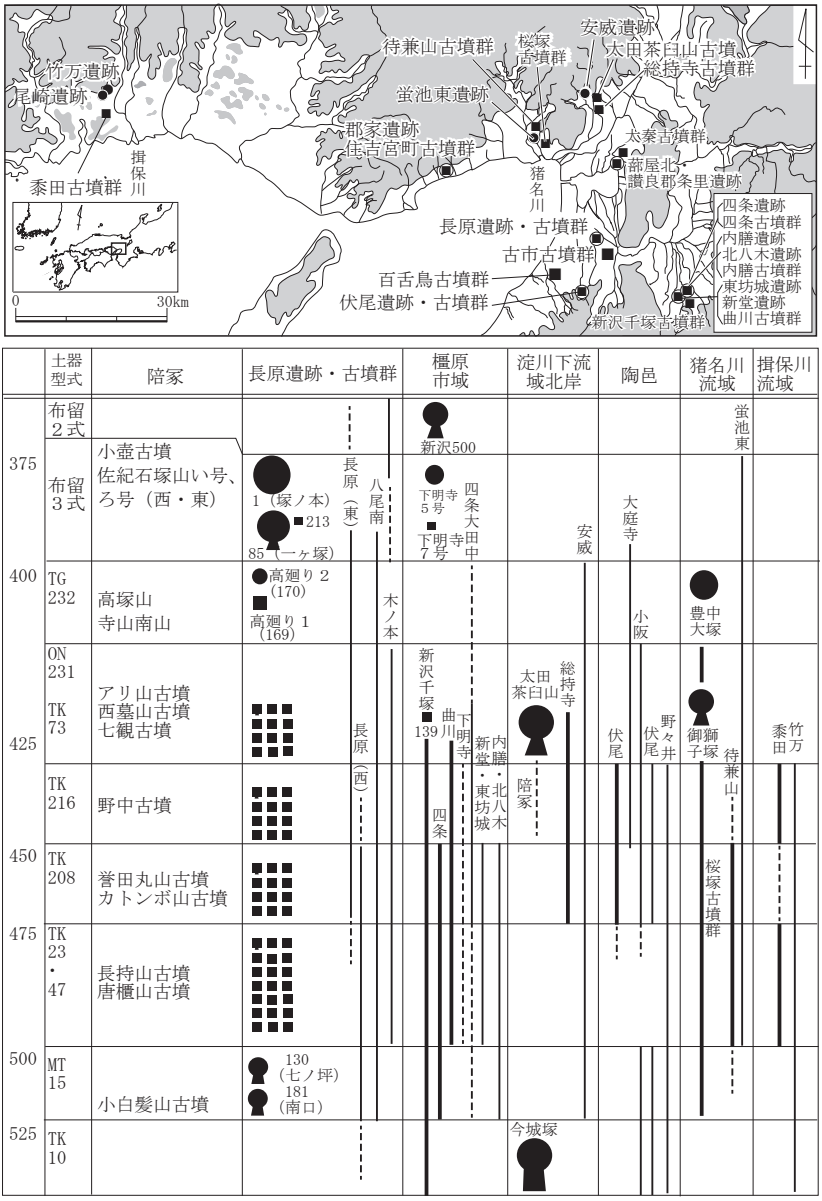


図7　初期群集墳の築造時期と集落展開

化とともに権力執行補助者として顕在化した陪冢造営主体が、その実務を実行するためには直属的な新興中小首長や有力成員との結びつきが必要であった。そして、初期群集墳被葬者すべてではないが、そのなかに実務担当、出仕可能な人物群があらわれつつあったと理解したい。

4. 原初的官僚層をめぐって

上に述べてきた古墳にみる統治機構の組織化は、第一に都市や官衙の存在がなく、古墳という墓制によって表示されている点、第二に文書行政の不在、さらに第三点目として基本的に人格的・血縁的な関係をもって維持されている可能性が高く、これらの諸点に鑑みても官僚制とはほど遠い。

官僚制をめぐって　古典的学説の位置を占めるマックス・ウェーバーの議論においては、官僚制の特徴は①規則により秩序づけられた明確な官庁的権限、②職務体統、③役所の存在と文書主義、④専門化した職務活動、⑤専業的労働、⑥規則性とまとめることができる。しかし、ウェーバーは工業化以後の近代社会に特徴的な政治組織として官僚制を理解したために、古代の官僚制を十分に論じることはなかった。ウェーバーの官僚制論を吟味しつつ、古代から現代に至るまでの官僚制を通時的に検討したカメンカは、官僚制の本質として①中央指向、②規則に基づく体系的、階層的な組織構造、③官僚機構の上あるいは外側に立つ支配者や総督によって命じられた政策による膨大な行政的職務の日常的かつ効率的な実行といった 3 点を掲げ、古代社会においても官僚制とも呼ぶべき行政組織の形成がなされたと論じる（Kamenka 1989）。

官僚の出現を国家の指標の 1 つとして捉えたエンゲルスの研究も重要である（エンゲルス 1884）。マルクスやエンゲルスの時代では資料的な制約が大きかったが、考古学および人類学研究の進展にともない、世界各地で官僚制形成の議論が進んできたことも大きい。ヘンリー・ライトは首長制段階においては首長 1 人が全ての情報を処理しているが、国家段階では情報量が増大

するために、特定の情報を専門的に処理する官僚が出現すると考え、その存在は 4 階層以上の集落の存在によって証左されると説く（Wright 1977）。初期文明を都市国家と領域国家に分類したブルース・トリッガーは、領域国家において官僚制が進展すると論じ、初期の官僚制はより個人的で法の縛りが弱いと指摘する（Trigger 2003）。また、高宮いづみは古代エジプトにおいても官僚組織を復元する手掛りは限られている点に留意しつつも、古王国時代以降、ピラミッド建造という大規模国家事業の関与によって官僚組織の充実、中央集権化の進展が起こったとまとめ、墳墓造営の進展が官僚制を形成する引き金になったと考える（高宮 2006）。このように統治組織が墳墓に表示されているという考え方は、中国古代においても類似し、殷周以来、君主の側近・侍従を殉葬・陪葬してきた伝統を基礎に、前漢代の陪冢が発展したと論じた研究（劉慶柱・李毓芳 1991）、漢代陽陵（景帝陵）の従葬坑が、生前の官僚組織、軍団を再現しているという焦南峰氏の指摘とも響き合うところがある（焦南峰 2007）。

日本列島の古墳時代においては墳形と規模による前方後円墳体制が論じられ（都出 1991）、最近では統治の手段としての古墳築造が評価されている（福永 2013）。このなかで陪冢と初期群集墳もまた、幅広いエリート層から成る統治組織の一端を示しているものを理解することも一案である。

ただし、陪冢においても初期群集墳においても明瞭な職務は未分化であると考えられ、人格的あるいは血縁紐帯が強いと考えられる点から、厳密には本格的な官僚の出現とみることは難しい。しかしながら、後の官僚層につながるような中央集権化を指向する近臣や陪臣を前者に、広範な実務担当者の存在を後者に想定することは可能だろう。本稿では原初的官僚を上のように捉え、5 世紀代における統治組織の発達を読み取りたい。

5. 今後の課題

本論ではこれまでの学説史をまとめつつ、5 世紀を中心とする陪冢と初期

群集墳を対象に原初的官僚層形成について吟味した。

以上の論点については、国家形成論の根幹にかかわる大きな問題を孕んでいるために、さらなる分析、各地における比較研究が必要であろう。本格的な官僚制形成は群集墳被葬者層の拡大、古墳築造の停止に伴って大きく変質していく。この論点については文献史学の成果をふまえたさらなる検証が必要となるため、今後の課題としたい。

［注］

1）　野中古墳第 2 列遺物群の鉄鏃数量に関しては三好裕太郎氏の教示を得た。
2）　新技術の導入を当初から政治的契機とみるか、それとも在野の試行が後に中央政権によって把握されるに至ったのかといった点は、今後も出土資料の綿密な分析によって吟味する必要はある。ただし、筆者は基本的に新技術の導入は古墳時代中期における中央政権の対外交流戦略の柱であると考えている。
3）　こうした古墳群の衰退過程には多様性がみられるが、6 世紀以降の政権交代論のなかで新たに出現する群集墳との関係性を論じる必要がある。
4）　ただし、この現象は全土的に浸透したものではなく、引き続き前方後円墳は築造されているなど、複雑かつ重層的な支配関係が認められる。

［参考文献］

一瀬和雄 2012　「古墳群と群集墳」『古墳時代の考古学』2　古墳出現と展開の地域相　同成社
石部正志 1958　「副葬用陪塚の発達」『考古学手帖』3
石部正志 1980　「群集墳の発生と古墳文化の変質」『東アジア世界における日本古代史講座』　第 4 巻　学生社
植野浩三 2005　「渡来人と手工業生産の展開」『ヤマト王権と渡来人』　大橋信弥・花田勝広編　サンライズ出版
エンゲルス，フリードリッヒ（村井康男・村田陽一訳）1884（1954）　『家族、私有財産および国家の起源』　大月書店
大庭重信ほか 2005　『長原遺跡発掘調査報告』XⅡ　大阪市文化財協会
大庭重信 2006　「長原古墳群」『シリーズここまでわかった考古学　太秦古墳群発掘調査成果関連行事　大阪の初期群集墳を考える』　大阪府立近つ飛鳥博物館・大阪

府文化財センター
岡田　務・山下真子編 2008 『尼崎市埋蔵文化財調査年報』平成 10（2）・11・12・13・14 年度　尼崎市教育委員会
岡戸哲紀 1997 「第Ⅵ章第 2 節　古墳時代中期における伏尾集落の位置づけ」『陶邑・伏尾遺跡Ⅲ　A 地区』 大阪府教育委員会・大阪府文化財調査研究センター
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館・橿原市教育委員会 2006 『海を越えたはるかな交流』 秋季特別展図録
京嶋　覚 1997 「初期群集墳の形成過程　―河内長原古墳群の被葬者像をもとめて―」『立命館大学考古学論集』Ⅰ　立命館大学考古学論集刊行会
岸本道昭 1989 「長原古墳群の歴史的意義」『大阪文化財論集』 大阪文化財センター
岸本道昭 2008 『竹万遺跡』 たつの市教育委員会
北野耕平 1976 『河内野中古墳の研究』 大阪大学文学部国史研究室
近藤義郎 1952 『佐良山古墳群の研究』 津山市
近藤義郎 1983 『前方後円墳の時代』 岩波書店
小浜　成ほか 2005 『総持寺遺跡―古墳時代中期の小規模古墳群の調査―』 大阪府教育委員会
櫻井久之 2001 「長原遺跡の小方墳」『大阪府埋蔵文化財研究会（第 43 回）資料』 大阪府文化財調査事務所
阪口英毅編 2014 『七観古墳の研究―1947 年・1952 年出土遺物の再検討―』 京都大学大学院文学研究科
白石太一郎 1976 「石光山古墳群の提起する問題」『葛城・石光山古墳群』 奈良県立橿原考古学研究所
鈴木一有 2014a 「野中古墳の築造時期と陪冢論」『野中古墳と「倭の五王」の時代』大阪大学大学院文学研究科
鈴木一有 2014b 「七観古墳出土遺物からみた鋲留技法導入期の実相」『七観古墳の研究―1947 年・1952 年出土遺物の再検討―』 京都大学大学院文学研究科
清家　章 2001 「猪名川左岸域における小古墳の意義―埴輪の規格から見た地域支配―」『待兼山遺跡』Ⅲ　大阪大学埋蔵文化財調査委員会
瀬川貴文 2001 「群集墳研究の現状と課題」『東海の後期古墳を考える』 東海考古学フォーラム
関　真一 2007 「古墳時代中期における一地域の様相」『考古学に学ぶ』Ⅲ　森浩一先生傘寿記念献呈論集　同志社大学考古学シリーズ刊行会
十河良和ほか 2012 『百舌鳥古墳群の調査』6　堺市教育委員会
高橋照彦 2014 「古市・百舌鳥古墳群の被葬者像」『野中古墳と「倭の五王」の時代』大阪大学大学院文学研究科
田中清美 2005 「河内湖周辺の韓式系土器と渡来人」『ヤマト王権と渡来人』 大橋信

弥・花田勝広編　サンライズ出版
田中　琢 1990 『倭人争乱』 小学館
高宮いづみ 2006 『古代エジプト　文明社会の形成』 京都大学学術出版会
田辺昭三 1966 『陶邑古窯跡群』Ⅰ　平安学園考古クラブ
田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
都出比呂志 1991 「日本古代の国家形成論序説　－前方後円墳体制の提唱」『日本史研究』343 号　日本史研究会
都出比呂志 1996 「国家形成の諸段階　－首長制・初期国家・成熟国家－」『歴史評論』551 号　歴史科学協議会
寺井誠ほか 2006 『長原遺跡発掘調査報告』XV　大阪市文化財協会
寺沢知子 1985 「渡来系集団墓の一様相」『同志社大学考古学シリーズ』Ⅱ　考古学と移住・移動　同志社大学考古学研究室
寺前直人 2001 「古墳時代中期における倭王権の地域支配方式―豊島地域における小古墳の検討を通して―」『待兼山遺跡』Ⅲ　大阪大学埋蔵文化財調査室
豊島直博 2010 『鉄製武器の流通と初期国家形成』 真陽社
中久保辰夫 2012 「渡来人がもたらした新技術」『古墳時代の考古学』7　同成社
中久保辰夫 2013 「渡来系集団の定着過程と河内地域の集落展開」『古代学研究』第 199 号　古代学研究会
中久保辰夫 2014 「野中古墳出土土器とその意義」『野中古墳と「倭の五王」の時代』大阪大学大学院文学研究科
西川　宏 1961 「陪塚論序説」『考古学研究』第 8 巻第 2 号　考古学研究会
西嶋定生 1961 「古墳と大和政権」『岡山史学』10　岡山史学会
西本和哉 2009 「生駒山西麓地域における古墳時代中期の古墳群形成の特質」『考古学研究』第 55 巻第 4 号　考古学研究会
仁木聡編 2014 『倭の五王と出雲の豪族』 島根県立古代出雲歴史博物館
埴輪検討会 2003 『埴輪論叢』4　埴輪検討会
橋本達也 2014 「野中古墳における甲冑の大量埋納と倭政権の武装」『野中古墳と「倭の五王」の時代』大阪大学大学院文学研究科
広瀬和雄 1984 「群集墳研究の課題と方法」『歴史科学』96 号　大阪歴史科学協議会
広瀬和雄 1992 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』近畿　山川出版社
福永伸哉 2005 『三角縁神獣鏡の研究』 大阪大学出版会
福永伸哉編 2011 『古墳時代政権交替論の考古学再検討』 平成 20 ～ 22 年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書　大阪大学大学院文学研究科
福永伸哉 2013 「前方後円墳の成立」『岩波講座　日本歴史』第 1 巻　原始・古代 1　岩波書店
菱田哲郎 2007 『古代日本　国家形成の考古学』 京都大学学術出版会

藤田和尊 1993　「陪冢考」『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念　考古学論叢』
藤田和尊 2006　『古墳時代の王権と軍事』　学生社
藤田和尊 2011　「陪冢論の現状」『古墳時代の考古学』3　同成社
松本正信ほか 2000　『山津屋・黍田・原』　兵庫県揖保川町教育委員会
マックス・ウェーバー（阿閉吉男・脇圭子訳）1921-1922（1997）　『官僚制』　恒星社厚生閣
森浩一・宮川徙 1953　『堺市百舌鳥赤畑町カトンボ山古墳の研究』　古代学研究会
山田幸弘 1998　『西墓山古墳』　藤井寺市教育委員会
和田晴吾 1992　「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』第 5 巻　近畿Ⅰ　角川書店
和田晴吾 2004　「古墳文化論」『日本史講座』第 1 巻　東アジアにおける国家の形成　歴史学研究会・日本史研究会編　東京大学出版会
劉慶柱・李毓芳（来村多加史訳）1991　『前漢皇帝陵の研究』　学生社
焦南峰（鈴木裕明訳）2007　「漢陽陵従葬坑の基礎的考察」『博古研究』第 33 号　博古研究会
Kamenka, Eugene. 1989. *Bureaucracy*. Oxford: Blackwell Publishing.
Trigger, Bruce G. 2003. *Understanding Early Civilizations*. Cambridge University Press.
Wright, H.T. 1977. Toward an Explanation of the Origins of the State. In *Explaining Prehistoric Change*. J.N. Hill, ed, pp. 215-230. University of New Mexico Press.

［補記］本稿は、野中古墳出土品整理作業および待兼山古墳群発掘調査に参加するなかで着想を得たものであり、大阪大学考古学研究室をはじめとする多くの方々にご教示いただいたことを感謝したい。なお、本研究は JSPS 科研費課題番号 25770276 の助成を受けたものである。

（埋蔵文化財調査室助教）

SUMMARY

Note on the Formation of the Proto-bureaucracy during the Kofun Period

Tatsuo Nakakubo

In this article, we explore the development of proto-bureaucracy or administration in the Japanese archipelago during the Kofun Period. The Kofun Period, which spans from the mid-3rd century to the mid-7th century, witnessed the emergence of the Yamato Kingdom, a unified, central administration, and the spread of keyhole-shaped tombs across most of the Japanese archipelago. In the 5th century, two new types of small kofun emerged. The first type is satellite tombs, called "*baichō*", which were built around the large keyhole-shaped tombs. The second type is dense groups of small tombs, called "*shoki gunshūfun*". We assume the figures buried in the former to have been administrative staff and those in the latter to have been emergent political groups tied to the development of new settlements and the organization of craft production. We interpret the appearance of these new types of small tombs, which display a high degree of similarity, as reflecting the formation of the proto-bureaucracy.

This proto-bureaucracy, however, lacked concrete occupational specialization and was characterized by personal or familial ties. Nevertheless, it displayed considerable centralization and was supported by a network of subordinates carrying out a wide range of tasks. The proto-bureaucracy of Japan did not come about as a result of internal factors, but rather developed as the central administration attempted to incorporate those emergent elite tied to the development of new settlements and the management of new technology introduced by immigrant groups.